

「ものがわかるということ」：要約（1/1）

自分を自由にしてくれるものの見方、考え方

養老孟司 著 祥伝社 令和5年2月初版

B・5・212ページ



養老孟司(1937～)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/養老孟司>

その他の著作

1989年「からだの見方」

2003年「バカの壁」

その他

「唯能論」、「自分の壁」

「遺言」、「ヒトの壁」

「解剖学教室へようこそ」

「半分生きて、半分死んでいる」

「子どもが心配」、「まるありがとう」

「死を受け入れること」

はじめに

若い頃は、勉強すればなんでも「わかる」と思っていた。どういう本でも読めばわかるはずだ、という前提が自分にあったに違いない。若いころの私は本のように世界を「読もう」としたのである。世界が本であるなら、確かに読める。「字は読める」が中身を本当に理解したかどうかは、もちろんわからない。80代の半ばを超えて、人生を振り返ってみると、わかろうわかろうとしながら、結局はわからなかった、という結論に至る。世界をわかろうとする努力は大切である。でもわかってしまっただけではいけないのである。その土俵の際が難しい。その種のことを考える人にとって何かの参考になればありがたい。

第1章 ものがわかるということ

代数がわからない

代数がわからない子どもはなぜ、 $2a-a=2$ が間違いか分からない。 $2a$ というのは a が2つあるということを表示するという約束事があることを理解していないから。社会には有無を言わせない約束事がある。

他者の心を理解する

人間は「同じ」と「違い」の両方を認識するが、他の動物は「違い」しか認識出来ない。人間は他人と自分との「違い」も、「同じ」も認識することから、他人を理解する。

現実も人間も変わり続けている

言語から抽出された論理は、圧倒的な説得性を持ちます。言葉は外部メモリー、つまり記憶装置です。

情報や記号で埋め尽くされた社会

情報社会と言うと、絶えず情報が新しくなっていく、変化の激しい社会をイメージする人が多いかも知れませんが、私の捉え方は全く逆です。テレビだろうが動画だろうが一度映された時点では、変らないものになる。同じ映像を何度見ても、映像は変わらない。変わっているのはそれを見る人間が変化(経験)しているから。

言葉で伝えられない世界もある

4択問題を嫌う子ども、数学を嫌う子どもは「正解」の押しつけを嫌うのか。世の中には常にalternative(別の)答えが求められているのでないか。

身体を伴って理解する

解剖も、虫の標本作りも細かな手作業です。学習とは「身につく」こと、身体を伴ってわかることです。脳への入力には五感です。対して、出力は筋肉の運動です。文武の文は入力(視聴触嗅味)、武は出力(話す、書く、運動する)。

「比例」がわかるということ

幼児は見えるものと自分の身体の位置関係から比例関係を体得していく。

聞くだけでは話せるようにはならない

入力と出力の行ったり来たりというループの典型が言葉です。複雑な筋肉の運動から声が出て、それが自分の聴覚で捉えられます。これが学習の基本です。

T.K.の個人的意見・感想

福沢諭吉「学問のすすめ」

1872年(明治5年2月)初編出版

<https://ja.wikipedia.org/wiki/学問のすすめ>



「定義」を理解する。自然科学の法則は世界共通、永続する。人為的規則は変わりやすい。

「同じ」を認識する
「違い」を見つけ、作ることが差別・格差を作る。

「情報」は過去の記録を認識し軌跡をたどること。

「言葉以前の五感・メタ言語」
創造とは別の答を探すこと。

「脳の構造」
大脳・小脳・扁桃体・海馬
「条件反射」、「試行錯誤」の
繰り返し、蓄積、組み合わせ。

脳のメカニズム

知るとは自分が変わる事

知ることの本質について、私は学生に、「自分ががんの告知をされた時のことを考えてみなさい」と言っていました。宣告され、それを納得した瞬間から、自分が変わります。世界がそれまでとは違って見えます。でも世界が変わったのではなく、見ている自分が変わったんです。知るとは、自分が変わる事なのです。

都市化が進み、自然は「ない」ことにされた

現代の人たちは、偶然を受け入れることが難しくなっています。都市化が進んだからです。戦後日本の特徴をひと言で言えば、都市化に尽きます。都会の人々は自然を「ない」ことにしています。

早く大人になれと言われる子どもたち

都市生活者には子どもの先行きが読めないから、子どもに投資できない。一次産業では子どもは労働力として期待され、育てられる。

子育てや自然は「どうなるかわからない」もの

都市生活、工業化社会は合理性を徹底して追求する。子育て、自然相手の一次産業では予測出来ないことがある。

第2章 「自分がわかる」のうそ

脳から考える「わかる」ということ

わかる(疑問解決)のためには予備知識・過去の体験がある。わかれば、それが新しい知識・経験となり、別の疑問に備えることになる。脳細胞は記憶(予備知識・体験)をもとにコンピューターのように演算(思考)する。

頭の中のさまざまな世界

$2a-a=2$ を「 $2a$ から a を引くと(取ると) 2 です」は日常言語としては間違っています。しかし、代数の世界では間違いとされます。しかし、脳の中には日常言語(常識)の世界の他に、いろんな言語の世界があります。文科系の世界、理科系の世界、日本語の世界英語の世界、政治の世界、経済の世界、芸術の世界など。

体験して「わかること」、頭の中だけで「わかる」こと

学問の世界では、それぞれ日常言語の世界とは違う世界観が作られています。 $2a-a=a$ は数学言語の世界、頭の中だけでわかること。これを日常言語に置き換えると、2個のリンゴから1個のリンゴを取るとリンゴは1個になります。日常言語に置き換えると、五感、身体で見て、触って分かります。

「わかる」の基礎となる学び方

蝶を取るのが上手な人がいる。その人は何度も失敗を重ねて、経験から失敗しない方法を体得している。言葉で地球は丸いと言われても、平坦な地上に住んでいると理解できない。宇宙から見た地球の映像を見せられて納得する。

人は言語、通貨などシンボルを共有する

ホモサピエンスだけが共通の言語、シンボルを持ち、集団が共同体を形成し、維持している。文明はまず、言語などのシンボルによる共通理解に始まり、それから論理、哲学、数学による強制了解、さらに自然科学による実証的強制了解へと進んで来たと言えるでしょう。

変化する自分を、脳はうまく扱えない

情報(過去)は動かない、変化しないのに、人間個人は変化していきます。変化する自分個人を脳はうまく扱えません。個人の名前がその典型です。自己を固定するとどうなるか。それが身分制度です。封建制度が典型です。

西洋と日本で違う自己の考え方

西洋社会、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教では、「靈魂不滅」で「身体」とは別物と考え、「個」を強く意識し、言語では「主語」は必須。日本では全く逆。日本語では一人称「手前」は二人称「てめー」としても使われる。

近代的自我が侵入したことで

日本と西洋とを比較して、「日本人には自我がない」「個の確立が重要だ」「自分の意見をはっきりいえるように」「個性を伸ばせ」といった主張があります。その発端は、明治に近代的な自我が侵入してきたことにあります。イギリスに留学した夏目漱石は、近代的自我をよく知っていました。しかし、漱石は個人主義を推奨し、近代的自我を導入せよと主張したではありません。漱石や森鷗外など、近代の文学者の作品の中には、近代的自我の問題が見え隠れしています。その漱石が晩年にはなんと「則天去私」と述べました。第二次世界大戦では無私ならぬ、滅私奉公、一億玉砕の世界になってしまった。結果は敗戦。そこから西洋的な自己も大手を振って歩くようになったわけです。

感じる: feel

見る: see, look, watch

気づく: aware, notice

知る: know, acquaint

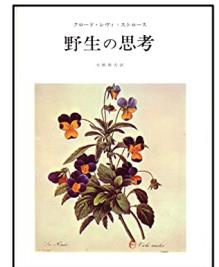
認識する: recognize

悟る: ?

ピストロス「野性の思考」

「野性の思考」の維持が必要。

動物的な勤・感覚の意識。



「学習」の連鎖・蓄積

コンピューターは判断基準が入力されないと判断できない。

「バイヤス」、「偏見」、「誤解」、「嫌悪」が発生する原因。「価値判断基準の違い」の認識

「自転車」、「水泳」は言葉で教えたり、覚えたり出来ない。身体を動かして覚えるもの。

人間以外の動物、植物も「メ言語」を持ってコミュニケーションをとっている。

「価値観」が大きく異なる集団は共同体を維持出来ない。行政の「強制執行」は自然科学でなく、社会・人為による。

「変化しない」個人は封建的?

中国、ヨーロッパでは人称代名詞は少ないが日本語では多い。

土居健郎「甘えの構造」では別の切り口で分析しています。滅私が共同体に過剰な依存をするという。中根千枝「タテ型社会」では共同体の依存が垂直・タテ型に依存するという。R・ベネディクト「菊と刀」では「恥」が行動基準になっているという。

人間自体が情報になった

「自分」探しという人は、どこか西洋的な「私」を取り入れているのでしょう。1910年代に、フランク・カフカは「変身」という小説をかきました。主人公のグレゴール・ザムザは朝起きてみると、自分が等身大の大きな虫に変わっている。そのときザムザは相変わらず自分はグレゴール・ザムザだと思っています。ほとんどの人は、情報化社会とはコンピューターやTVが大量の情報を流していると考えます。私は情報化社会を違った意味で使います。人間自体が情報になったのです。

有名人の「固有名」は単に個人を特定するだけでなく、特有のイメージ・意味を持ち、プロフィールという情報になる、ということか。
(福沢諭吉:1万円札)

死ぬことを理解できない現代人

情報化社会では、情報と人間がひっくり返しに錯覚されるようになりました。自分の名前は情報ですからいつも「同じ」です。死ぬということは変わらないはずの私に変化することです。仏教で生老病死は人の一生が変化の連続だと言っています。子どもが一番速く変化する人たちです。情報化社会になると、情報はカチカチに固まって子供までも固めてしまう。

生老病死が日常的な時代から、誕生も死も病院にアウトソーシングされ非日常になった。

心は共通性を持っている

心とは共通性そのものです。心に共通性がなかったら「共通理解」が成り立ちません。話が通じるとは考えが「共通する」ということです。感情だって同じです。私の個性は私だけのものという思い込みがあります。心に個性はありません。個性とは何か。個性とは身体です。大谷翔平の身体を誰もまねできません。脳は身体ですから個性があります。ところがその脳の働き、特に心と呼ばれる働き、意識の働きは共通でなければなりません。

血縁社会の共通性は親族
一次産業社会の共通性は土地
二次産業社会の共通性は加工
三次産業社会の共通性は信用
四次産業社会の共通性は理念

認められたいとき個性にこだわる

若い人が個性にこだわるのは、自分が社会的に生きていくとき、価値を認められていないという気持ちがあるからでしょう。身体を作るのは遺伝子の作業です。遺伝子の組み合わせは、一人一人違います。身体についてはクローンを作る以外に画一化は出来ませんから、個性はいつだって存在します。他人が真似をできないことが個性です。

individual ≠ character ≠ personal
承認欲求はマズローの最終欲求

知識や教養は反復し、身につけるもの

人生諸事万端、すべて学ぶことの基本は反復練習です。反復練習に個性はないように見えます。でも反復練習しないと個性は出てきません。教育に個性という言葉を持ち込んだとき、この言葉は身体に該当すると思った人がいなかったようです。知識も教養も「身につける」ものです。「身」とは身体のことです。伝統芸能はすべて「型」の学びから入ります。

パブロフの「条件反射」
アメとムチの反復練習
ドーパミン(脳内報酬)分泌条件
自転車・水泳・自動車練習時間
歌詞・セリフ・経文・英語習得

マニュアル人間が生まれた背景

「個性」を發揮せよと求められるのは、子どもだけではありません。会社でも学者の世界でも同じようなことが言われます。会社ではユニークな人材になれと言っておきながら、利益をだしたかどうかで評価される。このような奇妙奇天烈な要求の結果、「マニュアル人間」が大量に生まれました。「本当の私はあなたたちには分かりません。だから、マニュアルを示してくれれば、それに従います」。

工業化社会では標準化、品質管理が人間にも求められる。
創作活動は自主的判断が大前提。

好きなことははっきりしているようでしていない

マニュアル人間になるな。自分の好きなことを仕事にしろ。これもよく聞く話です。自分の好きなことって、実ははっきりしているようでしていないものです。そもそも、どんな仕事だって、好きなことばかりできるわけがありません。何かの仕事をしようとする、実はたいていの場合、ありとあらゆることをしないといけないことになります。臨床の医者になったら好きなことはできないと思った私は、基礎医学なら自分のやりたいことがやれるだろうと考えました。でも、実際に解剖をやってみると、研究以外にいろいろなことをしなければならなくなりました。好きなことをやりたかったら、やらなくちゃいけないことも好きになるしかない。この結論に至るまでに10年以上かかりました。

「仕事」の成果を高め、深めようとする、必然的に派生する「作業」を見つけ出し、こなさなければならなくなる。

趣向、好みは変化する。
流行、ファッションが存在するのは「飽きる・疲れ」があるから。

嫌なことを好きだと思ってやるのが面白い

私は、初めは(解剖の)献体集めをするつもりはありませんでした。でもその仕事のおかげで、研究では学べない、いろんなことを学べた気がします。自分の責任で、自分の好みで、世の中が成り立っているわけじゃない。内田樹(たつき)さんはこのことをサッカーにたとえて、うまい表現をしています。「サッカーのゲームはすでに始まっている。そこへ君たちは選手として放り込まれる。ところが、ルールも身体の動かし方も何にも知らない。だけど、放り込まれたら、周りを身ながら必死で覚えて動くしかない。それが実は、仕事するってことなんだ」と。お亡くなりになった方の献体を引き取りに歩いたことで、普通だったら学べないことを非常に沢山学べました。

センデビデッティ
やって見ないと分からないことが沢山ある人生で、いつまでやって見るのか、それが問題。
幼少年期、青壮年期、老年期、ライフステージによって対象が変わる。決心しないと前に進めない。

自分は探すものではなく創るもの

比叡山「千日回峰行」というのがあります。それを終えると大阿闍梨(だいあじやり)」という称号が貰えます。走り回った挙句の果てに、本人が変わります。千日回峰行をする前と後で、本人がどこかしら変わる。それだけのことですが、人生とは「それだけのこと」に満ちています。「それだけのこと」を続けていくと、自分が変わる。そうやって変わる自分を創っていく。自分とは「創る」ものであって、「探す」ものではありません。それが大した作品にならなくたって、仕方がない。それがわかっただけで、個性とか、本当の自分とか、自分にあつた仕事とか、つまらないことは考えないほうがいい。どんな作品になるか分からなくても、ともかくできそうな自分を「創ってみる」しかありません。そのために大切なことは、身体の世界や感情の世界、つまり具体的な世界を身をもって知ることである。そこで怠けると、後が続きません。

探す＝?
ask, find
look for, seek
research
discover
study
explore
創る
create
build up
compose

第3章 世間や他人とどうつきあうか

理解しなくても衝突しない方法

相手の言うことを一から十まで理解しなくても、ぶつかることは避けられます。ポイントは相手の出しているサインのようなものを察知することです。「いまは話しかけない方がいい」とか「ここで近寄るのはまずい」とか地雷さえ踏まなければ衝突しなくても済む。相手のことがわからないのは、なにもあなたの理解力が足りないからでなく、たいていの場合、前提が違うからです。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/アンガーマネジメント>

anger management

すべてが意味に直結する情報化社会

「理解する」とか「わかる」と言うと、みんな「意味」と結び付けて考えがちです。今の世の中は意味のあるものしか価値がないと思っている。すべてが意味に直結する社会を情報化社会と言います。今の意味のあるものしか価値がないと思っている。意味のないものを全部無くした一つの象徴が、会社の無機質な会議室です。それと対照的なのが山とか森です。都市文化にとっては意味のない無駄なものばかりですから。人間なんかいなくても、自然は成り立っています。脳も世の中と同じです。脳の大部分は無意識という「意味のない部分」が占めていて、意識なんて氷山の一角です。そもそも、意識がすべてをコントロールできると考えるには間違いです。コップの水を飲むとき、意識は飲みたいから飲んだと思っている。脳が「こうしよう」と思ってから、その後に行動すると考えている人が多いけど、実際は逆です。行動してからコンマ何秒か後に意識するのです。自分の行動は、すべて自分でコントロール出来ていると思っている。そんなものは驕りです。

図書館、アーカイブス、美術館
博物館はどうか。工場、農場
里山、里海はどうか。
価値は経済価値だけでなく、
文化価値、歴史価値、政治価値
最近では環境価値も。

複雑な行動・意思も単純な行動
意思が構成されたものと考え
ると、それができる人と出来ない
人との違いはどこで生まれる
のか？

通じないという前提から始める

外国のいいところは、通じないという前提から始まることです。これは楽です。たどたどしい外国語をわかろうとしてくれる人はたいてい親切な人です。いつも、私は別に伝わらなくてもいいと思って喋っています。私の書いた本を読んだ人から「先生、なんかぶつぶついています」といわれたことがあります。ぶつぶつ言っていると、それを読む人は適当に解釈して受け取ってくれます。

同質な社会、善意が前提に
なっている社会ばかりではない。
相手が攻撃的、策略・陰謀的、
敵対的な場合はどうする？

世間の常識からズレていると思っていた

私は小さい頃から、絶対にこの世間の常識から外れていると思っていました。医学を学び始めても、人の心に興味がありました。精神科の医者になろうと思いました。医学部を卒業して、精神科の大学院を受験しました。志望者が多く、くじ引きで外れて考え直して解剖学を専攻することになりました。

日本は世間と人間がセットになっている

世間とは何か。日本語では「人＝人間」です。人間は「人と人の間」ということです。欧米では、人は「間」ではありません。中国語も人は人です。日本の人間は、世間とセットになっている。世間に入るには資格が入ります。ただし、その資格は明文化されていません。法律的には日本人でも、世間はすんなりと受け入れてもらうのは簡単ではありません。世間の常識が欠けている事があるからです。日本では五体満足でなければ世間から外される傾向にあります。サリトマイト児の生存率は日本では30%で欧米の50%と比べて20%も低い。日本では「あえて治療しない」という選択によって生存率が低くなっているのです。こうした例からわかるように、世間の一員になるためには、見かけまで含んだ「暗黙」の資格が必要になります。ややこしいことに、世間は一つではありません。日本という大きな世間があります。その長は天皇です。この大きな世間は、たくさんの小さな世間を入れ子のように含んでいます。日本人はこういう複数の共同体に属して生活しているわけです。

日本社会の特徴を研究した
事例は幾つかあります。
土居健郎「甘えの構造」
中根千枝「タテ型社会」
R・ベネディクト「菊と刀」
共同体の構造は社会学の恰好
の研究対象です。
ピラミッド・ヒエラルキー型
マトリクス・縦横型、クラスター型
蝸壺・分散型、村・集落型
年齢別人口構成型

世間 = 共同体？

世間とどう折り合いをつけるのか

私はこの世間になじむことが出来ませんでした。世の中に、自分が「そこにいて当然だ」と思える居場所がなかったということです。家庭は別です。

この課題は人間にとっては
永遠の課題。家庭にも居場所
のない人もいる。亡命者、
家出人。出家者。アウトロー。

世間に違和感がなければ、そこにいるのが当然という帰属感を得ることができます。会社に務めて定年までいる。それが出来るのは、会社に自分がいて「当然」と、どこかで思っているからです。現代の若者なら、たとえどこの組織に属していても、そんな帰属感なんてないと思うかも知れません。私もそうでした。でも、帰属感がなければ、人間はなかなか落ち着けないのも事実です。家族も一つの世間です。私が生まれた時代でいえば、父親が世間の代表であるのが当たり前でした。ところが私が4歳の時、父は結核で死にました。以降、私にとって、母親が世間の代表です。私の母親は何をするにも自己流です。家の外にある世間のモノサシなど知ったことかという人でした。とうてい、私はまねできるものではありませんでした。幼稚園も学生時代もどこにいてもなじめないの、自分は世の中のことがわかっていないという意識が強くありました。世の中には、世間のルールに何の疑いもさしはさまず、暮らしている人たちがいます。そこにいることに何の遠慮もない。そういう人たちは私よりも世の中のことがわかっているに違いない。それが出来ない自分は無知だと思っていたんです。

自分も他人もわからなくて当たり前

自分が変わり、相手も変わる。他人のことがわからないのは当たり前です。他人だって、あなたのことがわかるはずがありません。「誤解している」というのは「正解」があるという前提に立っているからです。正解なんてあると思わないほうがいい。大事なはその誤解をどう受け入れるかです。誤解は誤解のまま放っておくしかありません。常に同じ正解があるわけでない。理屈や論理は、いつも「同じ」であるものしか扱えないからです。

対人関係のトラブルを避けるには

理屈や意味を求めても、人と人との機微に気づくことは出来ません。気づくのは一瞬です。気づかなければ素通りです。その瞬間はもう永遠に訪れません。それには感覚を磨くしかありません。旅先で道を訊くとき、できるだけ親切そうな人を見つけようとする。これも味方を見つける感覚でしょう。理屈ではありません。人生にはこういう人を見抜く感覚が絶対に必要です。人を見抜く感覚さえ磨いておけば、対人関係の面倒なトラブルは避けられます。

感覚的に捉えるのが苦手な現代人

都市社会、情報化社会では、社会が感覚を消していく方向に進んで行くからです。中でもテレビの責任は大きい。テレビの映像はカメラマン個人の視点です。視聴者は一つの視点が現実であるかのように感じてしまう。感覚は身体的なものです。感覚が落ちると、言葉や概念の重要性にも気づけなくなります。感覚が抜けた人たちは思考のすべてが言葉から始まってしまふ。感覚の世界は人それぞれに全部違うということがわかっていけば、言葉を「ありがたいもの」だと感じます。概念的思考だけが肥大してしまい、言葉の世界から始まってしまふと、言葉の有難さがわからなくなります。通じることが当然であると思込んでしまふのです。通じないことの方が大量にあることになかなか思い至らなくなります。結果として、現代の人は人間関係まで、明文化して、決めないといけな思っています。その結果、ますます感覚が落ちていく。そのなれの果てがSNSです。

SNSは純粹脳化社会

SNSには身体がありません。純粹脳化社会です。言葉、概念だけでコミュニケーションをする。概念の力は「同じ」をつくることです。違いは認めない。概念には身体や感覚がないから、言葉のありがたみがわからない。粗末な言葉、乱暴な言葉を出すことに躊躇がありません。目の前に相手がいたら言えないことも、平気で言えるのがSNSでしょう。SNSで過激な言葉で他人を非難して、それなりのリアクションが返ってくると、その瞬間は気持ちがスカッとするでしょう。それで問題が解決されたわけではなく、先送りにされただけです。

不愉快なことがあったら他人のせい

SNSのような情報化社会での対人関係では、人のせいにする傾向が強くなります。都会には人の作ったものしか置いてないので、何か不愉快なことが起これば、他人のせいになりやすい。SNSではなおさらです。

人疲れしたときは「対物の世界」に

世界は見方によって、「対人の世界」と「対物の世界」に大きく分かれています。最近の小説にも、「対人」が中心になっているものが多く、自然の描写が少ないようです。昔の文学、小説はそうではなくて、「花鳥風月」がありました。自然の

チャップリンは米国に居場所がなくなった。亡命者ばかり。それに気づかない人が大多数。釈迦、キリスト、ムハンマド、孔子・・・彼らは彼らのスタイルで追求した。過去・現代の政治家、経営者、若者、反社勢力、戦争当事国それぞれの方法で追求している。LGBTQ、SDGs、外向、立法、税制、金利、外国為替レート、福祉、医療、インバション 世間とどう折り合いをつけるかが常に課題。

行動経済学では情報の非対称として、商取引で対等な関係が難しいとしている。(スパイが存在する理由)

営業活動は最たる状況、クレーム対応、店頭対応、訪問活動、会議を多く経験することと思います。

日常の言葉、パスポートの表記では男(Male)、女(Female)と性別を分けています。現実の世界では、心理的に一致しない人、生物学的には分類出来ない場合がLGBTQとして顕在化しています。同じようなズレが別の言葉でも潜在的にあります。原因は言葉の「概念・定義」がズレていることです。そのズレがなくなることはありません。galsone(仏)は男性？

言葉・概念の膨大な情報量を単純化、省略化して扱うことに問題があるのでは。単純化≠抽象化

風景というのは、人間の外側に、人間の意思とは無関係に広がっています。人疲れしている人は、人間でないものを相手にすればいい。

「朝顔に釣瓶取られて貰い水」
「閑さや岩にしみ入る蟬の声」

思い通りにならないことを知る

世の中には思い通りにないことがあることを知る。それが寛容の始まりです。自分も変わっているし、相手も変わっている。変だと思ったら、それは自分が変なのか、相手が変わったのか、どちらかです。いまの人は「相手が変だ」というほうが多い気がします。自分は変わらないと思っているからです。それを「不寛容」と言います。寛容になるためには、思い通りにないことを受け入れたうえで、少しずつ状況を変えていくしかありません。

独裁者、全体主義者、テロリストは「思い通りにない」ことを知りたくない人達か。

第4章 常識やデータを疑ってみる

脳化社会は違うことを嫌う

意識に振り回されると日常が脳へ追いやられる。意識は「同じ」しか扱えないからです。同じの最たるものは数字でしょう。物事を数字にすればするほど、世界はどんどん単純化する。人間も数字にしたほうが便利です。数年前、銀行で手続きをしようとしたら、本人確認の書類提出を求められました。免許証もなく、健康保険書も持って行かなかったから、行員は私が「養老孟司」とわかっていても、手続きは円滑にできませんでした。それより数年して、答えが出ました。本人はいまや「ノイズ」です。本人の情報さえあればいいんです。生身の顔色や機嫌、声、匂いなど、すべてが感覚所与、つまりノイズなのです。医療現場でも、肉体を持った患者さんはどこかへ行ってしまうと、検査の結果だけが事実になってしまった。「担当の先生は、顔も見ないんです。カルテを見て、パソコンを見ているだけ、手も触らない」と私が他の医者に紹介した患者が言いました。会社で同じ部屋で働いていても、上司や同僚にメールを送りつけるのも、ノイズを排除したいからです。人間もコンピューターに近づいてしまっているからノイズが入っていると処理しきれない。

デジタル化の大きな問題点
ネガティブ事項対策
個人情報保護法
暗証番号設定
顔認証システム導入
なりすまし対策
ハッカー防止
公平・平等制度設定
AI依存思考力低下
ポジティブ事項
業務効率・高度化
多大情報利用
情報共有化

数字が事実置き換えられる情報化社会

私は57歳のときに肺がんが疑われました。私は喫煙者です。喫煙者はがんになりやすいというデータがあるので、検査の結果が出るまで、その可能性はあると覚悟していました。結局、肺がんはありませんでした。がんになる要因は一つではありません。発症する現実の仕組みは複雑です。にもかかわらず、がんを予防するためには複雑化を取り払い、単純化して因果関係が設定される。タバコを吸う人と吸わない人を比較すると、タバコを吸う人の方ががんにかかる確率が高いことがわかります。それで喫煙とがんの因果関係が「実証」されるわけです。統計というのは、個々の症例の差異を平均化して数字として取り出せるところだけに着目してデータ化します。統計においては、差異は「ないもの」として無視しなければなりません。世界で最初に禁煙運動を始めたのはナチスのヒトラーです。ヒトラーは非喫煙者で、国民の健康増進運動の一環でタバコを禁止し、それが優性思想に結びつきました。国が国民生活に踏み込み、習慣を変えさせようとするのは、戦時中の「欲しがりません、勝つまでは」と同じです。

問題点は
定性的データと
数量的データとの
使い分け。
論理性。

身体の声聞くために必要なこと

統計的データは、あくまで判断材料の一つです。今後、医療システムの中にAI(人工知能)が本格的に入ってくるはずですが、事情は変わりません。もしも、最終的な判断をAIに預けるような医者が出てきたら、どうしようもありません。数値に目を奪われていると、健康のためにそれだけが重要なことのように思われてきます。健康診断に一喜一憂する人はこの罠にはまっていると言えます。大事なことは身体の声聞くことです。身体の声聞くには、自分が「まっさら」でなければなりません。私は花粉症がありますが、症状がひどくても、これまで薬は飲まないようにしてきました。薬で症状を抑えてしまうと、身体の声が聞こえなくなるのではないかと思うからです。

2020年3月の図書紹介で「FACTFULNESS」を取り上げました。

ニュースを自分の頭で考えるために

ウソは3つの段階で生まれると考えています。
第一段階は記号化する段階です。典型的なのは捏造です。意図的にウソを作る。現代では写真や映像も簡単に加工できます。
第二段階は、記号化した情報を発信・受信する段階です。メディアが扱える分量には制約があります。そこで発信する情報の取捨選択が行われる。これは普通の会話でも同じです。

第三段階は、無意識のレベルで生まれるウソです。意識は記号化できないものを無視します。記号化できるものだけを現実や事実と認定するのですから、具体的な状況が抜け落ちてしまいます。言葉や数字にすること自体でウソが生まれやすい。意識はそのことに気づくことができません。この「無意識」に初めて気づいたのがフロイトです。
こんなふうにと考えると、誰だって本当のことばかりでなく、ウソを言っていることになります。ニュースはすべてフェイクだと思っているくらいが安全です。フェイクをどんどん利用しようとする人がいたとしても、受け取るほうが騙されなければいいです。政治家からするとそうした頭が冷えている人たちが一番扱いにくい。周りがそれを情報として受け入れなければ、広がることはありません。そっぽを向いておくのが一番いいんです。

地球温暖化の問題をどう捉えるか

地球の温暖化も簡単に判断できるものではありません。私たちが感じている温暖化で一番大きな要因は、ヒートアイランド、つまり都会が熱くなっていることです。これは当たり前です。都会で密集して熱を出しているのだから、都会を直火で熱しているようなものです。温室効果がスで地球温暖化が起こっているかどうか、私は「わからない」としか言えません。地球温暖化は、人為的かどうかで意見が分かれています。国連は人為的温暖化で動いていますし、世の中でもそう言われています。アメリカの元副大統領アル・ゴアは『不都合な事実』で、人為的温暖化論を訴え、ノーベル平和賞をとりました。アル・ゴアは何をしたかったのか。想像するに、おそらく中国やインドにプレッシャーをかけたかったのでしょう。「温室効果がスの排出量を減らせ」と言うことは「石油をなるべく使わない」と同義です。しかし、欧米は簡単に石油の消費量を減らすわけにはいきません。本気で温室効果がスの増加を心配するのなら、排出を抑制する一番の方法は石油の生産調整です。

未来予測は自分の変化を棚上げする

『バカの壁』を書いた当時、林野庁と環境省の懇談会に出席しました。そこで出された答申の書き出しは、「CO2増加による地球温暖化によって次のようなことが起こる」となっていた。私は「これはCO2増加によると推測される」というふうに書き直して下さい」と注文をつけました。するとたちまち官僚から反論があった。彼らは「国際会議で世界の科学者の8割が二酸化炭素が原因だと認めています」という。しかし、科学は多数決ではありません。地球全体で温暖化しているかを測るだけでも大問題です。温暖化の影響にしても、「ああすれば、こうなる」のような単純な因果関係で語ることはできません。生態系はものすごく複雑ですから、何が何の影響なのかを簡単に判断することはできません。単純な因果関係は単純な系でしか成り立ちません。それでも脳化社会の住民は「ああすればこうなる」が最も「理想的」だと信じて疑わない。疑うことを放棄したら、自分の頭で考えることはできません。見方が変われば、統計をとっている当の自分自身が変われば、統計のとり方も違ってきます。ウィーン生まれの科学者カール・ポッパーが提唱した「反証可能性」という考え方があります。反証の可能性のある言明が科学だと言うのです。どんなことも100%ではないのだから、鵜呑みにするなど言っているだけです。地球温暖化の理由が温暖化効果がスである可能性は高いと考えてもいいでしょう。これを100%と捉える人は、狂信や盲信に陥りやすい。下手すると、カルト宗教に走ります。

「生物多様性」の言葉に感じる矛盾

環境問題では、「生物多様性を守れ」という言葉もよく聞きます。しかし、私はそもそも「生物多様性」という言葉自体に矛盾を感じています。生態系に対する知識、感覚があまりにもなさすぎるという現実を、私はずっと「都市化」と呼んできました。現代の人達が生物多様性とか環境とか言っても、私は本当は無駄だと思っています。地球上には、菌類から人間まで、あらゆる生物が共存しています。何一つ同じ「モノ」はありません。生物多様性とは、ことばでなく、自分自身の「感覚」を使って初めて理解できることなのです。

環境問題は身体の問題でもある

私たちは、文明を使って人工的に作り出した「秩序」の中に生きています。でも、秩序はタダでは生まれません。その代償として、どこか別の場所では「無秩序」が生まれます。たとえば、都会の野良犬を保健所で保護し、飼い犬はすべて鎖でつないだことで、田舎の畑は猿や鹿、猪に荒らさるようになってしまった。自分たち以外の生き物を排除して発展してきたわけですから、人間はそんな無秩序には気づきもしないでしょう。

アンケートの設問次第。

SNSの炎上対策。
プロパガンダ対策。

科学的根拠の問題
技術的、経済的な問題
政治的、戦略的問題
世界覇権問題
南北問題
石油は戦闘機の必需品
石炭は製鉄の必需品
発電源は石油・石炭から
代替に進行中
OPECは別の理由で生産調整

2021年ノーベル物理学賞の
真鍋淑郎さんは地球温暖化の
「予測モデル」で受賞。

かもしれない、という余裕が
人を寛容にする。
断定、決めつけは人を不寛容にし、
進歩・変化の障害になる。

日本語の終助動詞「か、かも、
かな」は感嘆、疑問、反語を
意味するとされます。
断定を避けて曖昧な余韻を
残す感覚は他言語にはあまり
見られないように思います。
むさびは木末(こぬれ)求むと足引の山の
狐師(さつを)に逢ひにけるかも(万葉集、志貴皇子)

曖昧さは現代国際社会では
理解されにくい日本人の
感覚かも。

仏教だけが生き物の殺生を
戒めているようです。

東西宗教観の違い
犠牲(いけにえ) = sacrifice
犠牲・被害 = victim

意識はそれでいいかも知れません。でも、そのツケは身体に回ってきます。
自然のない世界にいるのだから、実験室で飼っているネズミと変わりありません。

複雑な世界を単純化したい現代

ある星を望遠鏡で百倍に拡大すると、宇宙は百倍になる。他の星もその精度で見なければいけなくなる。すべての星をそうやって観察できるでしょうか。精密に調べればそれだけ問題は増えていきます。いくら調べたってキリがない。世界はそれだけ複雑にできているのに、意識はそれを単純化して説明しがります。

スーパーコンピュータの精度
日常の四捨五入の簡易さ
多数決の現実性
自然科学の世界と
社会科学の世界の違いか。

人間が機械に似てくる脳化社会

最近ではAIが人間の仕事を奪うなんてことがよく言われます。コンピュータにできることを人間がする必要はありません。百メートル走をオートバイと競う人がいないのと同じです。人間がコンピュータと将棋を指して負けたからといって、コンピュータが偉いわけではありません。それならクルマもオートバイも偉いことになります。脳とAIの最大の違いは、身体があるかないかです。AIが人間に似てくるという人は、人間は融通が利く生き物だということを忘れていきます。機械は融通が利きませんから、人間が機械に似ている。融通を利かせながら、融通が利かなくなっているのが現代人です。

機械には遊び(クリアランス)が必要なものがあります。単純な道具は融通が利きます。複雑な道具は融通が利きません。では人間は？

単純労働が非人間的か？

第5章 自然の中で育つ、自然と共鳴する

都市化が進み、頭中心の社会になった

日本は、現在でも森林が豊かな国です。約4割は人工林ですが、国土の7割近くを森林が占めています。昆虫もたくさんいます。イギリスのように徹底的な環境破壊にいたらなかったのは、日本の自然が非常に丈夫だからでしょう。昔の日本人がなんとか食べてこられたのは、自然の恵みが豊かだったからにほかなりません。都市化する以前、人間は自然と共存していました。日本人の根っこには「自然とは折り合いをつけるもの」という感覚がある。これは自然を相手として認めているということでもあります。

古代ギリシアのプラトンの「国家」は都市国家の政治について書いているが、その中には自然についての言及がありません。欧米の脳化社会はすでにこの時代から始まっていたといえるかも。神道は自然崇拜とも言えます。

自然とつきあう知恵とは

日本人が自然と付き合う独特の知恵として「里山」があります。里山の雑木林が教えてくれるのは、自然は手を入れた方が一面では豊かになるということです。

里山と同時に、里海も。

循環型の江戸時代

江戸時代は生産力が低かったこともあって、徹底的なリサイクルが行われていました。現代でいう循環型社会です。江戸時代のリサイクルの大きな特徴は、屎尿(しによ)処理にあります。人口百万人と言われた江戸は世界でも有数の大都市でしたが、下水道はありませんでした。屎尿がリサイクルされていたからです。同じころ欧米では屎尿を川に流していました。欧米の大都市では屎尿を川に流すと生活は立ちゆきません。それで下水道が発達したのです。そもそも日本の都市には城壁がありません。おそらく日本人は都市と村との間に塀など必要ないと思ったのでしょう。

欧米型のコミュニティと日本の村社会との違いは城壁、塀の有無にあるかも。(強い団結、緩い団結の違い)

「手入れ」の気持ちがあるかどうか

江戸時代の有名な儒学者に荻生徂徠がいます。儒教は「道」ということを説きます。徂徠はそれまでの儒学者と違うには「道」の解釈です。徂徠は道は自然にあるのではなく、昔の聖人が作ったものであると断言します。道とは人為的なものだということです。人の生については「人為ではない、これは天である」といいます。この場合の天というのは自然です。徂徠は自然の道と人間の道という二本の道を別べつに建てている。私はこれを自然と都市と呼びます。二宮尊徳もこれとよく似た思想を展開しています。尊徳は「人間の作った構築物・家や塀は風雨で朽ちていく。それは天道である。朽ちる構築物を手入れし、修復するのは人道である。」と説いています。「手入れ」は自然と付き合いときだけ必要なのではなく、身づくろい、化粧、子育てなど日常生活のあらゆる場面に関わっています。どんな時も心の底に「手入れ」という気持ちがあるかどうかで、小さな判断すら変わってきます。

外来思想、文化を日本に合わせて改造、改革してしまうのは日本の伝統かも。(代骨奪胎・脱亜入欧)

式年遷宮
通過儀礼(七五三、元服・・・)
風姿花伝・初心(時々決心)

自然の存在を認めることから

手入れとは、まず自然という相手を認めることから始まります。自然という相手を認めるなら、次にそれを自分の都合のいいように動かすにはどうするか、その問題がでてきます。それが「手入れ」の基本です。自然と付き合うには、地道な努力に加えて、予測ができないことを我慢する忍耐が求められます。わからないことを空白のままに、何割か分かればまあそんなところだと思ってとりあえず付き合い。そういう辛抱が必要になるのです。都会に住む現代人が努力・辛抱・根性を嫌うのもよくわかります。周りに自然があるわけなし、自然と付き合うための性格など、特に要求されません。

自然(しぜん)≡Nature
自然(じねん)≡as it be
日本人の自然に対する思い入れは根底に
神道の思想があるかも。

頭の回転が速く、気が利いて、上手に言葉が扱える。都会で生きていくにはそのほうがはるかに重要だと、日々体験しているのです。

子どもという「かけがえのない未来」

子どもは何かの目的があって生まれてくるわけではありません。人の一生もそうです。生きる意味や目的を言いたがる人はたくさんいますが、私たちは何らかの目的のために生きているわけではありません。毎日、生きることに必死になっていれば、そんなことを考える余裕なんてありません。一人ひとりの一生はなんだかわからない一生です。子どもだって将来どうなるかわかるはずがありません。そういう当たり前のことが、都市の中に暮らしているとわからなくなります。「ああすればこうなる」は人工の世界、都市の世界です。自然はそういうものではありません。すべてが予定の中に組み込まれていったときに、いったい誰が割をくうのか。それは間違いなく子どもです。子どもはなんにも持っていないからです。知識もない、経験もない、お金もない、力もない、体力もない、何もなし。子どもが持っている財産とは何か。それこそが、いっさい何も決まっていない未来、漠然とした未来です。それを「かけがえのない未来」と呼びます。大人は、子どもが好きなことをやっていると、それが何のためかという無意味な質問を繰り返す動物です。私はそれを子どもの頃から知っていました。

生産性の低い社会では子どもは労働力として生み、生産財としても扱われた。

生物はただ種の存続、繁栄だけが目的なのか。

人間だけが生きていく中で個人が目的、目標を作るものなのか。

現在の少子高齢化の問題は生産財、消費市場として考えられているのでないか。

感覚より言葉が優位になる

都市の中で生きていると、感覚はどんどん失われていきます。たとえば、絶対音感の人は、昔は小さいときから楽器の教育をしないとそういう特殊能力は身につかないと言われていました。ところが動物を調べてみると、調べた限り全部絶対音感なのです。耳の構造を考えると理解できます。耳の中が共鳴する。共振する場所が決まっているから、同じ高さの音は同じ場所で震えます。音の高さは絶対にわからないといけないうのです。動物が全部絶対音感であるということは、人間の赤ん坊も絶対音感をもっています。でも多くの人はいずれそれを失ってしまう。なぜそうなのか、言葉が関係しています。赤ん坊は音程の違う人から名前を呼ばれても自分のことと意識、認識するために、音程よりも言葉の意味を優先して理解しようとし、音程の違いより意味を優先して意識しないとコミュニケーションがとれないからです。人間が言葉を使えるようになった一番の根本は「感覚よりも意識が優位になった」ことにあります。

音だけでなく、色彩、形状触覚、味覚、嗅覚についても同じことあるのか？
饒舌な人は言語感覚が優れていても、他の感覚は必ずしも優れているとはいえないかも。

鳥(シジュウカラ)は敵を認識し、仲間に音声で伝達するという。単語も文法もあるという。(東大・鈴木俊貴)
人間の言語構造と違ったメタ言語かも。

都市以外の場所で一定期間過ごす

私たちの祖先は最初水の中に住んでいて、シーラカンスみたいな恰好をしていた。いつの間にか遺伝子が変わってヒトになりました。進化というのは発生過程のわずかなズレで、それ以外のものではありません。5億年かかってわずかにズレてヒトができあがった。どこの時点で、すこしズレた魚が陸に上がりました。陸に上がると歩かなければなりません。いろいろ運動しなければならぬので、脳の中に運動のソフトウェアができあがった。5億年もかけているので運動のソフトウェアも非常によくなっている。それは自然の中で試行錯誤をして、身につけたソフトです。脳の中の世界だけに生きていると、身体的なソフトは劣化してしまいます。そのソフトを自然に手入れする感覚を少しでも取り戻すために、都会の人が、年に1ヶ月でもいいから、田舎の過疎地に滞在し、身体を使って働いたり、のんびりしたりできるようにするのです。「伝統文化を大事にしよう」と声だけ大きく張り上げて、日常的に自然と接触しなければ、絵に書いた餅にすぎません。自然災害の備えにもなります。

「人はなぜ登山するのか」
「人はなぜ海に行くのか」
現代ノマド(放浪民)

身体に力が入っていると虫の姿が見えない

「手入れ」は、簡単なことではありません。「努力・辛抱・根気」が必要です。里山は多くの生物からなり、刻々と姿を変える複雑なシステムです。そのシステムをいつも良好な状態に保つには、相手の置かれている状態を知り、これからどのように変化するかを、感覚的に予測しなければいけません。「手入れ」に対して「コントロール」は、相手をこちらの脳に取り込んでしまうことです。しかし、自然を相手にするときはそんなことが出来るはずがありません。虫を追いかけられているのも、虫がどこで何をしているのか、自分の脳がすべてを把握できるわけではないからです。できるだけ相手のルールを知ろうとする、これが自然と付き合うときの一番もつともなやり方です。夜中に森の中に入ったとき、身体のだこかに力が入っていると虫が見えない。完全に力が抜けていると見えると言っている人がいます。これは禅という無心の境地です。危機というのは予測できません。地震もゲリラ豪雨も、新型コロナもコンピューターでは予測出来ません。それに対応することもできません。

人間関係にも「手入れ」が必要なのか。

考えず、自分の目でみる

人は二度と同じ物を見ることはできません。同じ場所から富士山を見ていても、昨日と今日とは違います。自分の目でみるということはその日その時その場所で体験することで、二度とみることは出来ないもの、他人が見ることのできないものを見てみることで、何も考えなくていい、ただ見ればいい。解剖の実習で、初めて

プロとは「違いがわかる男(人)」

肝臓の組織を見ても、自分が何を見ているのかサッパリわかりません。それが肝臓の細胞だとわかるまでに、ある程度の経験が必要です。経験を積み重ねて初めて「これは肝硬変ではないか」と診断できるようになるのです。自然に身を置けば、発見の連続です。発見とは新種を見つけることではありません。自分が知らなければ、見た瞬間に発見になります。

「わかる」の根本にあるもの

以前、初めて会津に行ったとき、大きな樺(ケヤキ)を見せてくれました。大きな木を見ると、時計のように感じます。一本の木だって、35億年という途方もない歳月生き延びてそこに生えている。自然がわかる。生物がわかる。その「わかる」の根本は共鳴だと私は思います。人間関係もそうでしょう。

子どもの身体性を育てる

動物は共鳴することを知っています。暑い日、犬を連れた人が、海岸で犬を放すと、犬は海に飛び込んで嬉しそうに泳いでいました。動物と海は共鳴しています。江戸時代末期に日本を訪れたある外国人が、「子どもたちが幸せそうにしている」と旅行記に書いているのを読みました。当時はたくさん子どもが生まれても死んでしまう子どもが多かった。親は子どもの時代を存分に楽しませてやろうと思ったのでしょう。現代は子どもがそう簡単に死ななくなり、子どもの人生は、大人になるための予備期間になってしまいました。「将来」という言葉で子どもの人生を縛って、子ども時代を犠牲にしてしまうのです。暑いときに冷たい水に触れると、「気持ちがいい」という感覚が皮膚を通して入って来ます。それを感じるものが共鳴です。知人は夏休みに「30日31日キャンプ」というプログラムを行っています。人間にとって、自分の身体性は最も身近な自然です。自然は思うようにはならない。それを自分で理解するのです。

五感で受け取ったものを情報化する

私がお手伝いしている「ROCKET」というプロジェクトがありました。東京大学先端科学技術研究センターが始めた、子どもたちに好きなことをやらせる異才発掘プロジェクトです。子どもは何の役にも立たないと言われることでも、長い時間、丁寧にやるものです。そうやって自由にやらせると、非常にいいものができます。五感で受け取ったものを言葉や絵にして表現し、人に伝えるというのは、情報に変えていくという作業です。そういう作業はとて時間がかかります。だから、どんどんやらなくなります。大人はその辛抱がないので、そんなふうには絵を描きません。子どもが絵を描いていると、すぐに「何の絵？」と聞きます。「いますぐやりなさい」、「時間内に書き終えなさい」といいます。考えているだけで時間が終わってしまう子だっているはず。見たものを絵や言葉にするのにはとて時間がかかります。私は五感で受け取ったものを絵や詩に表現し、情報化できる人がたくさんいる社会が健康だと思うのです。

あとがき

私は今年の誕生日で86歳になります。ゾウムシを調べています。調べて何がわかるかという、たぶん何もわからないでしょう。大学の助手のときには、トガリネズミを調べました。それで何がわかったか。何もわかりませんね。「トガリネズミから見た世界」という報告書を科学雑誌「科学」に書きました。その中に私はトガリネズミを本当に理解するとしたら共鳴しかない、という趣旨のことを書きました。恩師の中井先生はそこに線を引いて「合掌」と書かれたんです。今でも思い出すと涙が出てきます。共鳴とは、二つの個体の固有振動数がたまたま一致した時に生じる、日常的には一見不思議な現象です。共鳴は意図して生じるものではありません。しかも無限の中の一点です。私はネズミになったり、ゾウムシになったり、ネコになったりしてきました。でも、なかなか共鳴までには至りませんでした。「わかる」ためには、意識や理性を外す。ここまできると、ほとんど宗教の世界になりますから、もうやめます。合掌。

以上。

自然科学の世界に身を置きながら、精神世界について考え続けてきた著者を尊敬します。この著書の底辺にはパスカルの「パンセ：人間は考える葦である」や、西田幾多郎の「善の研究」の認識思想を感じます。鎌倉生まれ、鎌倉育ちが鎌倉仏教・禅の思想を育んだと想像します。また、日本的な発想、日本の文化の特性も考えさせられました。

(T.K.)